

上野殿御返事

弘安四年三月一八日 六〇歳

蹲いも鴟一俵給び了んぬ。又かうぬしのもとに候御乳塩一疋、並びに口付一人候。

さては故五郎殿の事は、そのなげき吉ふりずとおもへども、御げざん見参ははるかなるやうにこそおぼえ候へ。なをもなをも法華經をあだむ事はたえつとも見へ候はねば、これよりのちもいかなる事が候はんずらめども、いまゞでこらへさせ給へる事まことしからず候。仏説いての給はく、火に入りてやけぬ者もありとも、大水に入りてぬれぬ者もありとも、大山は空へとぶとも、大海は天へあがるとも、末代悪世に入れば須臾しゆゆの間も法華經は信じがたき事にて候ぞ。

徽宗皇帝きそうは漢土あるじの主、蒙古国にからめとられさせ給ひぬ。隱岐おきの法王は日本国のあるじ、右京ごんの権の大夫殿にせめられさせ給ひて、島にてはてさせ給ひぬ。法華經のゆへにてだにもあるならば、即身に仏にもならせ給ひなん。わづかの事には身をやぶり命をすつれども、法華經の御ゆへにあやし科のとがにあたらんとおもふ人は候はぬぞ。身にて心みさせ給ひ候ひぬらん。たうとしたうとし。恐々謹言。

三月十八日

日 蓮 花 押

上野殿御返事